

京都大学 大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter

第8号

目次

アーキビストと歴史研究者

—大学文書館長就任の挨拶にかえて—
藤井 譲治 2

京大コンピュータ第1号KDC-I設計の
思い出

矢島 脩三 3

室賀信夫氏個人資料の寄贈

松田 清 5

「グラフで見る京都大学の歴史—ひと目
でわかる創立から現在—」およびCG映像
「創立期の京都大学—学生たちの一日—」
の公開を開始しました 7

京都大学における「学徒出陣」—文学部の
場合—

西山 伸 8

日誌 10

大学文書館の動き：

法人文書の一部を廃棄しました

..... 11

人の動き 11

資料提供のお願い 11

大学と政治

—「イールズ声明」をめぐる資料につい
て—

嘉戸 一将 11



構内での防空演習の様子(1943年ごろ)

1941年、全国の高等教育機関に教練、食糧増産作業、および各種団体訓練を行う組織として学校報国団を設置するよう文部省より訓令があり、京大でも9月に学生・生徒を隊員とし、教官らが指導に当たる報国隊が結成された。写真は、報国隊による本部構内での防空訓練の様子。学生隊たちの足にはゲートルが巻かれている。後方左に文学部陳列館、右に法学部経済学部研究室(赤煉瓦)が見える。1943年になると勤労働員が本格化し、加えて「学徒出陣」によって文系学部を中心に多くの学徒が徴集されるようになり、大学は教育機関としての役割を果たせなくなっていく。

アーキビストと歴史研究者

ー 大学文書館長就任の挨拶にかえて ー

京都大学大学文書館長 藤井 譲治

佐々木丞平先生が、2期4年館長を勤められたあとをうけて、昨年11月に館長に就任いたしました。私自身は、日本史を専攻する歴史研究者としてこれまで歩んでき、文書館学を専門としてきた訳ではありませんが、日頃、文書館専門職であるアーキビストと歴史研究者との相違点や共通点について色々と考えております。そこで、その一端をここに記すことで、就任のご挨拶に代えさせていただきます。

一般に、文書館専門職に歴史研究者が就くことはそれほど訝られることはなく、むしろ自然のように思われているようにも思います。両者は、確かに似かよところもありますが、大きく異なる点もあります。

文書館専門職を指すアーキビストという言葉は、近年少しずつ市民権を得るようになってきましたが、一般の方々にとっては、図書館の司書や博物館の学芸員ほど馴染みのある言葉ではありません。アーキビストとは、おおまかにいえば、文書館において文書記録等を収集・移管・引継ぎ、それらを評価・選別し、残したものを整理分析したうえで、保存・利用に供することを職務とする専門職といってよいと思います。すなわち、アーキビストは、生み出された文書記録のすべてを残すのではなく、「評価・選別」しなくてはなりません。この点が、残されたものを等しく史料として扱おうとする歴史研究者との最も大きな違いであり、時として対立・矛盾することもあります。いっぽう、評価・選別後の史料に対する姿勢はアーキビストも歴史研究者もそれほど変わりませんが、アーキビストはその史料を保存し、有用な検索手段を作り上げ、公開利用に供することが主たる任務であり、歴史研究者は、研究のために同様の作業をしつつも、それを利用し研究することが使命であると思います。

歴史研究者の立場からすれば、作成された

文書すべてを残すことは将来の歴史研究のために有用であることは疑いありませんが、日々それぞれの部署で作られ出される膨大な文書の量を考えると、とてもそのすべてを残すことは現実的ではありません。文書館で仕事をするアーキビストは、自らが属する組織が作り出した文書を、その組織の存立にとっての重要性を勘案しつつ評価・選別し、その一部を残すことを使命としていますので、評価・選別を終えた文書の多くは廃棄せざるをえません。



では、こうした評価・選別をする能力を備えたアーキビストが、現在の日本に十分育っているのかという点について決してそういう状況にはありません。1987年に公文書館法が制定され、翌年施行されたにもかかわらず、文書館を担う専門員のアーキビストについてはいまだ公的に認める法制度は整備されていません。現在、県立を中心としてかなりの数の文書館が各地に開設されてきていますが、その仕事を現実には担っているのは多くは歴史を研究してきた人達です。そして、彼等の多くは「評価・選別」することにいささかの戸惑いを感じつつも、さまざまに試行錯誤し、よりよい方向性を見出そうと努力しているところです。我が京都大学大学文書館も同様の状況下にあります。

歴史研究者とアーキビストの二足のわらじを履くことになった現在の自分にとっても、「評価・選別」という問題はかなり深刻ですが、この点を十分に自覚しつつ、この職務にあたっていこうと思っております。

京大コンピュータ第1号 KDC-I 設計の思い出

京都大学名誉教授 矢島 脩三

はじめに

表題の「KDC-I」の正式名称は「京都大学ディジタル型万能電子計算機第1号」であり、その英語名は「Kyoto Daigaku Digital Computer - I」、その略称が「KDC-I」である。今から45年前の1960年夏、本学に設置された「京大の最初のコンピュータ」のことである。

「インターネットの思想史」の著者である喜多草博士がKDC-Iに興味があると言われたのがきっかけで、昨年の暮れに、同博士と大学文書館の西山伸先生の両名が筆者の自宅にまで「KDC-I設計資料」の調査に来られた。そのような経緯で、この資料を大学文書館に寄贈することになった。

その資料の内訳であるが、筆者の設計メモや設計記録、設計や製造の図面、調整メモなどである。(株)日立製作所(H社)の製造図面も多く含まれている。KDC-I設計開発について博士論文を執筆のさいに、同社の好意で図面一式を別途に作成して下さったのである。お蔭で京大より学位を授与されたのであるが、KDC-Iの完成のために貢献された関係者は多く、今も深い感謝の気持ちで一杯である。

KDC-Iや初期の計算センターの詳細は、同センターやそれを引き継いだ情報処理教育センターの広報に記録されているので、ここではH社の工場で行われたKDC-I設計開発の思い出などを書かせていただく。

設計のため日立戸塚工場へ

1958年初頭、コンピュータ実現の方式でいうと、真空管式とパラメトロン式の東大、パラメトロン式の東北大について、京大の番となり、H社と産学協同でトランジスタ式のコンピュータを開発することとなった。

H社から同社のコンピュータ事業の始祖ともいべき岩間喜吉氏が来学して、設計する人がいない、誰かいないか、ということになった。このプロジェクトの京大代表でかつ筆者の恩師の前田憲一先生(故人)の薦めで、コン

ピュータの設計を研究していた筆者がH社に派遣されることになった。1958年秋、筆者がドクターコース1回生のときH社に赴いた。約2年間に費やして、H社の戸塚工場



においてKDC-Iを設計して調整稼働させ、1960年夏に完成したコンピュータとともに帰学した。

前田先生は電離層研究で世界的な学者であり、当時、計算尺で種々の計算をされていた。出発前、同先生からは、「他は、うごかなくて困っている、うごく(稼動する)コンピュータを作ってくれ、使いたいのだ」と言い付かった。生まれだてのトランジスタというもので、コンピュータなるものが原理的に可能であることを示すパイロットモデルを作って、博士号を目指す、という程度に思っていた。これが甘い考えであることが分かった。

HIPACとHITACの各第1号機を勉強させてもらう

KDC-Iを設計する前に、まず、H社の最初のコンピュータであるパラメトロン式の「HIPAC 1」の勉強を勧められて、1958年秋、日立中央研究所に、そのトップの高田昇平博士を訪ねた。ひと月間お世話になり、HIPAC 1を使い論理回路の計算をした。

ついで、H社の戸塚工場に赴いた。そこでは岩間喜吉氏の「何が何でもコンピュータ事業を立ち上げるのだ」という意気込みは壮烈であった。H社の最初のトランジスタ(ゲルマニウム)式コンピュータHITAC 301が開発の途中であった。その論理設計のチェックをやらせてもらい、調整も手伝わせてもらった。

KDC-I の論理設計

KDC-Iは京大独自のコンピュータとして設計することになった。同社の名称も、Bが追加された「HITAC 102B」となった。許可をもらったその日の夜から論理設計を始めた。

当時、コンピュータ設計やトランジスタ回路は新しい分野で、全て独学であった。設計では、特に、割り算のハードウェア・アルゴリズムで四苦八苦した。現在でも、これが超大規模集積回路(LSI)の観点から追究されているようであり感慨深い。

浮動小数点演算の論理設計をしていた頃、先述のHITAC 301の仕事の区切りがつき、同社のKDC-I担当が次々と決まった。開発が一気に加速した。これらの方々はH社のコンピュータパイオニアである。筆者の人生の恩人でもある。

コンピュータがうごくとは

「コンピュータがうごいた」をどのように証明するかで悩んだ。もちろん、検査プログラムを作成して調整に役立てた。しかし、京大に運搬してからトラブルが発生したら、瞬時に信用を落とす。これを理論的に証明することは出来ないようなので、結局は、いろいろとジョブを遂行しての実績の積み重ねしかないと思った。

KDC-Iで最初にランさせるジョブを考えた。KDC-I自体の配線問題を研究してプログラムを作成した。KDC-Iの心臓部の稼動テストを兼ねて、後から追加接続する予定のKDC-I磁気テープ制御装置の配線の計算ができた。この結果と人手設計との比較ができて感激した。

この時点で、前田先生に「KDC-Iがうごきました」と報告した。数日して京大から、萩原宏先生が工場に来てくださり、 e と π の各100桁を計算された。それらの計算結果と数表とを比べたところ合致した。

コンピュータは信用できるのか

電気計測や電気探査などの電磁界理論で著名であった清野武先生(故人)がMITの留学より帰国されて、KDC-Iに興味を示された。猛然と、KDC-Iの素晴らしいプログラムの数々を作成された。さらに計算センターを実現された。1961年には大学全体の共同利用が始まった。利用の有料化には驚愕動転した。トラブルが発生したら責任問題で詰め腹ものかと悩んだ。

KDC-Iは京大独自のコンピュータであるために、保守を十数年間京大スタッフ独自で行う仕儀となった。一枚一枚パッケージを抜いて微調整するのである。ある日、パッケージ一枚を元に戻し忘れていたのを見つけた。これが割り算の商を四捨五入する回路であった。それで切り捨てに解釈されていた。その間のユーザさんに連絡した。何人かが再計算された。「コンピュータは信用できるのか」という深刻な問題に発展した。

KDC-I 特許

KDC-Iの設計にさいして、特許の世界と初めて出合った。主としてIBMなどの外国特許を、まるでテキスト代わりに読んだ。その精細さと長い法律文章の英語に、度肝を抜かれる思いをした。H社の勧めで、筆者もKDC-I設計で考案実用した幾つかのアイデアを特許出願した。これらのうち十件ほどは成立したが、米国特許によって撃墜された悔しいのもあった。

おわりに

1960年、このHITAC 102B(KDC-I)は中央官庁の経済企画庁の第1号機ともなった。日本国経済にどれだけプラスだったかマイナスだったかまでは分からないが、大変名誉なことであった。

さて、後日談であるが、1997年にH社の汎用コンピュータ事業部創立35周年記念の行事があり、昔、KDC-Iを設計調整したということで、その年の暮に特別に招待を受け、夫妻でコンピュータ工場見学の機会を得た。当時のコンピュータの責任者の波多野泰吉氏(元工場長、元コンピュータ事業部長)や当時のKDC-Iの関係者、さらに取締役汎用コンピュータ事業部長小高俊彦氏にも迎えていただき、非常な感激と深甚の感謝の気持ちで幸せであった。

この工場で生産される最新鋭コンピュータの米国への輸出が好調との説明があった。しぶとい米国特許を勉強した当時を思い出して隔世の感を味わった。

KDC-Iは工学部1号館2階の大部屋を占拠する十数トンの巨大なマシンであった。半世紀近く経過した今、これをLSIシステムにすると、1平方ミリメートル程度の大きさのシリコンチップで実現可能である。その上、百万倍以上の高性能のものになる。

室賀信夫氏個人資料の寄贈

人間・環境学研究科教授 松田 清
大学文書館協議員

故室賀信夫氏(1907-1982)は、1933年(昭和8)京都帝国大学文学部史学科を卒業、京都帝国大学文学部講師をへて1943年文学部助教授(地理学)に就任、敗戦にともなって1946年辞職後は節を守って大学に職をもとめることなく、一貫して地理学史を専攻された。広範な視野と厳しい学問的態度を堅持され、1982年、寡作の学究として74歳の生涯を閉じられた。研究業績として、学位論文『仏教系世界図の地図学史的研究』(1961)、『古地図抄—日本の地図の歩み』(東海大学出版会、1983)、共編の編纂本として『地理学史研究』(柳原書店、1957創刊)、『日本の古地図』(創元社、1969)、『日本古地図大成』(講談社、1972)、『日本古地図大成・世界図編』(講談社、1975)がある。

京都大学附属図書館では1996年度に古地図、地理学史関係図書からなる室賀信夫氏旧蔵書(室賀コレクション)を受入れ、閲覧利用に供するとともに、1998年10月には同図書館において、室賀コレクション古地図展「日本の西方・日本の北方—古地図が示す世界認識—」が開催された。

筆者は1995年12月、室賀家の依頼をうけて室賀コレクションの調査を集中的に行い、翌年1月7日付けで仮目録を作成した。その内訳は、古地図511点、地理関係和本196点、洋装本2882点(5939冊)、洋書299冊、学術雑誌43点、その他2点、未整理資料(和文抜刷、欧文抜刷、原稿、研究ノート、切り抜き帳、書簡類、写真ネガ及びガラス原板、履歴その他の伝記資料)であった。古地図、地理関係和本、洋書のほとんどは、室賀家のご理解をえて、文部省大型コレクション購入費によって附属図書館に受け入れることが出来た。この受入にあたっては、故足利健亮人間・環境学研究科長(人文地理学)にご尽力いただいた。

未整理の個人資料については、地理学史関

係の貴重なデータおよび大戦中の地理学教室に関わる現代史史料をふくみ学術的価値が高いにもかかわらず、附属図書館受入になじまないとされたため、とりあえず研究室



にあずかり目録作成を行うこととした。上記の室賀コレクション古地図展の際には、この個人資料の中から、下記のもの展览展示した。

1. 飛騨地方の歴史地理調査ノート 1冊 昭和6年
2. 論文「飛騨国の交通系について—二三の歴史地理学的考察—」、『地理論叢』第5輯別刷 昭和9年
3. 論文「並河誠所の五畿内志について」、『史林』第21巻(昭和11年)第3号および第4号抜刷
4. 論文「章学誠とその方志学」、『地理論叢』第7輯別刷、昭和10年
5. 草稿「戦争経済遂行上より見たる資源を中心とする研究—英領馬來」 1綴 昭和14年9月
6. 政治地理講義草案「日本に於ける地政学的思考の展開」、1冊、昭和17年度後期・昭和18年度前期
7. 高等学校制度改正にともなう教授要綱原案草稿 1綴 昭和17年12月
8. 高等学校高等科臨時教授要綱 文部省専門学務局 昭和17年3月
9. 草稿「南方圏統治への地政学的試案」 1綴 昭和16年10月
10. 日本地理学史稿 第1草稿(全3冊の

うち)

11. 日本地理学史稿 第3草稿(全4冊のうち)
12. 仏教系世界図資料 研究ノート 1冊
13. 室賀信夫あて Carlos Sanz 書簡 1通
1964年8月25日付け

ところがまもなく、総合人間学部および人間・環境学研究科の改編、ついで大学法人化の過程が始まり、また旧教養部A号館の建て替えによる研究室移転もあり、なかなか目録作成に取りかかる機会をえなかった。一方、2000年に発足した京都大学大学文書館は2003年12月に開館する時計台記念館へ移転し、収蔵環境も改善されることになった。そこで、この好機をとらえ、お預かりしている個人資料を大学文書館へ寄贈していただくよう室賀家へ提案したところ、快諾をえた。「文書館寄贈・寄託資料受入要項」(平成16年10月1日大学文書館長裁定)も整うことになった。幸い、2002年度から科学研究費補助金特定領域研究「江戸のモノづくり」のなかで、「蘭学基礎資料の調査・研究」を主宰することになった。目録作成作業をその一環に組み込み、2003年度、2004年度の両年度をかけて、ともかくも仮目録を作成することができ、今回の個人資料寄贈が実現した次第である。今年3月末に、ふたたび研究室引越を余儀なくされたため、欧文抜刷および欧文来簡の一部が目録から漏れてしまった。これらについては、できるだけ早く目録を作成し、追加寄贈の手続きを進めたい。

仮目録といっても、時間不足のため整理分類をしないまま、排架順に作成したチェックリストにすぎない。正確な記載は望むべくもない。全714点の目録から印象に残った資料のみを摘記して概要紹介に替えたいと思う。前掲の展示資料は除く。

尋常小学校(大正6年3月)、東京府立第五中学(大正14年3月)、第三高等学校文科丙類(昭和3年3月)の卒業アルバム。旧制三高時代の写真類、文科2年の文芸誌La Voix。

講義録「地理学通論」(藤田元春教授、大正14年度)、「国史概説」(西田教授、昭和3年

度)、「自然学と人間学との関係」(小川教授、昭和5年度)、「東亜考古学」(濱田教授、昭和11年度)、「古文書学各論」(中村助教授)、「近世支那史概説」(矢野教授)、「国史概説」(三浦教授)、「東洋史概説」(桑原教授)、「日本考古学概説」(濱田教授)、人口地理学(石橋教授、昭和5年)、「東洋史概説」(羽田教授)、「東西交渉史」(宮崎助教授、昭和14年度)、「日鮮考古学」(梅原助教授、昭和14年度)、「自然地理学」(小川教授)。地理学特殊講義(室賀講師)の提出論文。史学科入学者名簿(昭和9、10、11年度)、史学科受験者名簿(昭和13年2月28日、昭和16年3月1日、昭和18年9月4日)。

日本諸学振興委員会地政学講演原稿(昭和18年11月)、皇戦会関係書簡(昭和14～17年)、総合地理研究会関係原稿(昭和14～15年)、皇戦地誌に関する意見(昭和15年11月)、進駐軍関係教職員資格調査控(昭和21年11月)、社会科地理教科書原稿、小学社会(1959)、小学国語原稿(1959)。千種帖(読書ノート、昭和20年頃から昭和51年頃まで)。

「伊能忠敬研究の回顧と展望」原稿および関係草稿。『蕃談』『南海紀聞』校訂解説原稿。古地図紙焼き写真476種(内訳、大43種、中152種、小281種)。

数量的にもっとも多いのは、師友、研究者からの封書、葉書類、および献呈された論文抜刷である。封書・葉書類は室賀信夫氏自身によってよく整理されており、戦前のものの382通、戦後の「勉強の手紙」と分類されたものの72通、「地理学史研究第二集」関係124通、『蕃談』関係156通、創元社『日本の古地図』関係49通、「保存書信未整理」27通、外国書簡約100通、その他約200通、総計1100通を越える。論文抜刷・冊子類は、「漂流記文献」20冊、「地理学史文献西洋」30冊、「地理学史文献東洋」65冊、「古地図目録」47冊、その他584冊、総計746冊に及ぶ。

最後に、室賀信夫氏個人資料を研究室にお預かりして今回の文書館寄贈にいたるまで、8年もの歳月が過ぎたことを室賀家にお詫び申し上げるとともに、貴重な個人資料をご寄贈いただいたことに深甚の謝意を表します。

「グラフで見る京都大学の歴史ーひと目でわかる創立から現在ー」およびCG映像「創立期の京都大学ー学生たちの一日ー」の公開を開始しました

大学文書館では、2003年度より学術情報メディアセンターコンテンツ作成室と共同で、「グラフで見る京都大学の歴史ーひと目でわかる創立から現在ー」およびCG映像「創立期の京都大学ー学生たちの一日ー」の制作にあたっていました。2005年3月に完成し、公開を開始しました。

前者は、京都大学の創立から現在に至る様々な数値データをグラフ化したものです。具体的には、「教職員数」「在学者数」「入学状況」「卒業者数・修了者数」「博士学位授与件数」「外国人留学生受入数」「外国人研究者数」「科学研究費補助金」「奨学寄附金」「受託研究費」「民間との共同研究」「蔵書数」の各項目を、必要に応じてさらに細分化して(「在学者数」を学部別や男女別に分ける等)カラーで分かりやすく示しています[図1]。これらの数値は『京都大学百年史』資料編3に収録されていますが、このようにグラフ化することによって、その歴史的变化を一望することが可能になりました。また、それぞれのグラフのなかでの重要事項については、トピックを設けて簡単な説明を付しました(「在学者数」における「最初の入学」等)。これにより、京都大学の歴史について、数値と事項の両面から理解を深めることができます。

後者は、舞台を1909(明治42)年に設定し、朝の通学風景から、大教室での講義、実習、少人数の演習、図書館での勉強、寄宿舎での食事等の様子を一連のストーリー展開として10分程度の2Dおよび3DのCG映像で描いたものです[図2]。図面や写真をもとに当時のキャンパスを正確に再現するとともに、豊富なエピソードを入れて、学生たちの一日を生き生きと描写するよう努めています。CG映像ならではの立体感と臨場感にあふれており、大画面の効果もあって、まるでその場にいるような気にさせてくれます。また同様に1914年の医科大学(現医学部)キャンパスを再現したCG映像も見ることができます。

前者は、閲覧室(歴史展示室の隣)に設置された2台のパソコンで、後者は歴史展示室内の映像ブースで見ることができます。多くの方のご来場をお待ちしています。



図 1



図 2

京都大学における「学徒出陣」

－文学部の場合－

京都大学大学文書館助教授 西山 伸

大学文書館では、現在京都大学における「学徒出陣」に関する調査・研究を行っている¹。本調査・研究は、出陣学徒数・戦没者数といった基本的データの確定と、関係者からの聞き取りという二本の柱からなっており、今年度中には報告書としてまとめる予定である。本稿は、基本的データのうち、調査が一段落した文学部について簡単にまとめたものである。

実は「学徒出陣」の定義は簡単な問題ではない。ここでは、深く論究することは避け²、今回の調査・研究においては、その対象を、最も有名な1943(昭和18)年10月の徴集猶予撤廃に伴って同年12月に陸海軍に入隊した学生生徒だけでなく、修業年限の短縮³が開始された1939年4月入学者から、敗戦直前の1945年4月入学者までと設定したことを前提として記しておく。

これまで、京大では「学徒出陣」についての調査は行われたことがなかった。例えば、1943年12月の出陣学徒数についても、近年刊行された『京都大学百年史』で当時の新聞記事を根拠に、法・文・経の各学部在学者⁴の8割弱だったと指摘するにとどまっている⁵。今回の調査では、各学部の全面的な協力のもと、一次資料により上記の調査対象時期における在学中の徴集者数・戦没者数の確定作業を行っている。そのうち文学部の入学年月別の数値を別表に示した。

まず、1943年12月に徴集を受けるのは主に1942年4月から1943年10月までの入学者だが、この時は在学者444人(表のC)のうち300人(D)が徴集されていた。さらに、その後に在学中に徴集

表 文学部在学中の徴集者および戦没者（1939年4月～1945年4月入学者）

入学年月	入学者 A	194311 以前徴集 B	B/A	194312 在学 C	194312 徴集 D	D/C	194401 以後徴集 E	E/A	徴集合計 F	F/A	在学中 戦死 G	G/F
1939年 4月	144	2	1.4%	2	0	0.0%	0	0.0%	2	1.4%	0	0.0%
1940年 4月	123	11	8.9%	5	0	0.0%	0	0.0%	11	8.9%	0	0.0%
1941年 4月	127	12	9.4%	12	4	33.3%	1	0.8%	17	13.4%	1	5.9%
1942年 4月	198	10	5.1%	123	84	68.3%	9	4.5%	103	52.0%	6	5.8%
1942年10月	252	7	2.8%	173	140	80.9%	9	3.6%	156	61.9%	20	12.8%
1943年10月	132	3	2.3%	129	72	55.8%	32	24.2%	107	81.1%	5	4.7%
1944年10月	160	-	-	-	-	-	124	77.5%	124	77.5%	4	3.2%
1945年 4月	181	-	-	-	-	-	118	65.2%	118	65.2%	5	4.2%
総計	1317	45	-	444	300	67.6%	293	-	638	48.4%	41	6.4%

- ・本科生のみ
- ・戦死には戦病死も含む
- ・高等学校の修業年限も3年→2年6カ月→2年と短縮されていたので入学年月は変則的になっている

を受ける者も多く、1944年1月から敗戦までの間に293人(E)に上っていた⁶。1943年11月以前に徴集されていた者も含めて、調査対象者のうち在学中に徴集を受けたのは638人(F)、全入学者の48.4%であることが分かった⁷。

また、在学中の戦没者は、合計41人(G)、徴集を受けた者の6.4%だった。1946年10月に大学主催で行われた戦没者慰霊祭の対象となった学生が全学で56人だったことから、これまで大学として把握していた数よりもずっと多くの学生が戦死していたことが推測される。なお、入学年月別に見ると1942年10月入学者の戦没者が20人を数え、飛び抜けて多いことも判明した⁸。

近年他大学でも同様の調査が行われているが⁹、学徒全体の動向のなかで徴集者数を把握するという意味において、本調査は画期的なものであると考えている。しかし、大きな問題として、大学所蔵の一次資料にもとづく調査の限界ではあるが、本調査ではそれぞれの学徒の在学中の軌跡をたどることができるのみであって、卒業後については全く把握できないことが挙げられる。繰り上げ卒業となり、卒業直後に徴集を受け、さらに戦死した元学徒についても調査を行わないと、「学徒出陣」の全体像は明らかにはできないであろう。この大きな課題も含め、これから文学部以外の学部でも調査を行っていく予定である。本稿では紙幅が不足、不十分な説明・分析に止まっているが、報告書においてはできるだけ細かく分析を行っていきたい。関係各位の一層のご協力をお願いする次第である。

-
- 1 平成16年度には総長裁量経費の採択を受けることができた。
 - 2 「学徒出陣」という語は、1943年6月に海軍報道部の編集で刊行された冊子『学徒出陣』に使われたのが最初と言われている(蜷川寿恵『学徒出陣』吉川弘文館、1998年)。「出陣」という語の響きにも表れているように、戦局が激しさを増すなか、学生生徒の入隊を促すために作られた言葉だった。したがって、歴史用語として適切かどうか議論があるところだが、代わりの言葉も今のところ見当たらないため、カギ括弧つきでそのまま使用する。
 - 3 入隊を早めるため、当時3年(医学部のみ4年)であった修業年限を、1939年4月入学者は3ヵ月繰り上げ、1940年4月以降の入学者は6ヵ月繰り上げて卒業させる措置がとられた。
 - 4 この時の徴集の対象者は、文系学部と農学部の一部であり、理系学部在学者の大部分は引きつづき卒業まで徴集を猶予されていた。
 - 5 記事が正確であるとする、当時の在学者数から計算して2000人を超える学徒がこの時京大から陸海軍に入隊したことになる。
 - 6 彼らは、1943年12月のような一斉入隊ではなく、個別に通知を受け、陸海軍に入隊していった。
 - 7 在学中の徴集者の数値には、大学入学前に徴集され、軍に在籍のまま入学手続きが取られた学生も含まれている。
 - 8 ただし、その一つ上に当たる1942年4月入学の「学徒出陣」組の多くは、当時の特例措置により軍隊にいる間に卒業手続きが取られており(1944年9月卒業)、戦死しても大学の統計に残らなかった例が多いと思われる。
 - 9 東京大学、早稲田大学、明治大学、立命館大学、立教大学などで調査が行われており、また慶応大学、青山学院大学では有志の教員・学生によって戦没者調査が進められている。

[日誌] (2004年10月～2005年3月)

- | | | | |
|------------|--|-------|---|
| 2004/10/ 1 | 学外より、第三高等学校の卒業生について照会。
新採用職員研修において、常設展「京都大学の歴史」を紹介。 | 12/20 | 矢島脩三名誉教授より、KDC-I 関係資料寄贈。 |
| 10/ 4 | 大学文書館教員会議。 | 1/ 5 | 第三高等学校関係資料(刊行物)の公開開始。 |
| 10/ 6 | 西山助教授、全国大学史資料協議会2004年度総会・全国研究会(於京都大学)において、「京都大学大学文書館の現状と課題—『大学アーカイヴズ』論への手がかりとして—」と題して講演。 | 1/12 | 第2回企画展「総長の肖像画」開催(～2月27日。於京都大学百周年時計台記念館歴史展示室)。 |
| 10/ 8 | 国文学研究資料館より、大学文書館の現状・設備について照会のため来館。 | 1/13 | 教員より、第三高等学校の卒業生について照会。 |
| 10/22 | 野田忠吉氏より、在学時代の受講ノート寄贈。 | 1/17 | 大学文書館教員会議。 |
| 10/25 | 大学文書館運営協議会。 | 1/18 | 西山、戦前・敗戦直後の京大について聞き取り調査(於大学文書館)。 |
| 10/27 | 西山、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会(全史料協)全国大会および研究会に出席(～28日。於山口県総合保健会館)。 | 1/19 | 教員より、戦前の理学部副手について照会。 |
| 11/ 2 | 附属図書館より、歴代総長肖像画14点移管。 | 1/24 | 西山、東京大学史料室・立教学院史資料センターへ出張。 |
| 11/ 4 | 旧経理部主計課移管法人文書の公開開始。 | 1/26 | 大学文書館運営協議会。 |
| 11/ 6 | 京都橘女子大学より、大学文書館の施設見学のため来館。 | 1/31 | 伊東和子氏より、生徒出陣関係資料寄贈。 |
| 11/ 8 | 大学文書館教員会議。 | 2/ 2 | 科研費研究会「大学所蔵の歴史的資料の蓄積・保存ならびに公開に関する研究」第3回研究会「大学アーカイヴズの今後」開催。 |
| 11/10 | 学外より、吉田南キャンパス内の吉田南総合館屋上の鐘および吉田南キャンパス正門について照会。 | 2/ 7 | 西山、戦前・敗戦直後の京大について聞き取り調査のため出張(奈良市)。 |
| 11/13 | 京都大学人文科学研究所創立75周年記念特別展「人文科学研究のフロンティア—歴史の語る未来—」開催(～21日。於京都大学百周年時計台記念館歴史展示室)。 | 2/ 8 | 朝尾直弘名誉教授より、在職時代の京大関係資料寄贈。 |
| 11/24 | 西山、戦前・敗戦直後の京大について聞き取り調査のため出張(東京都小金井市)。 | 2/15 | 西山、戦前・敗戦直後の京大について聞き取り調査のため出張(奈良市)。 |
| 11/29 | ケベック国立図書館より、大学文書館の施設見学のため来館。 | 2/17 | 嘉戸助手、国立国会図書館憲政資料室・国立公文書館へ出張(～18日)。 |
| 12/ 2 | 事務補佐員高井多佳子雇用。 | 2/21 | 大学文書館教員会議。 |
| 12/ 6 | 人環・総人図書館より、三高関係資料移管。 | 2/22 | 西山、国立国語研究所へ出張。 |
| 12/11 | 大学文書館教員会議。 | 2/23 | 保田助手、国立公文書館へ出張(～24日)。 |
| 12/13 | 小野恵美子氏より、岡康哉関係資料借用。 | 2/24 | 西山、戦前・敗戦直後の京大について聞き取り調査のため出張(京都市)。 |
| 12/16 | 西山、戦前・敗戦直後の京大について聞き取り調査のため出張(東京都大田区、小金井市。～14日)。 | 2/25 | 西山、沖縄県公文書館へ出張。 |
| 12/18 | 宮内庁書陵部より、大学文書館の現状について照会。 | 3/ 3 | 西山、研究会「大学共同利用機関の成立に関する史料アーカイブズ」(於総合研究大学院大学)において、「京都大学大学文書館の紹介」と題して講演。 |
| | 科研費研究会「大学所蔵の歴史的資料の蓄積・保存ならびに公開に関する研究」第2回研究会「大学所蔵の歴史的資料の整理について」開催。 | 3/ 4 | 読売新聞社より、生徒出陣調査について取材。 |
| | | 3/ 7 | 西山、広島大学文書館へ出張。 |
| | | 3/ 9 | 松田清研究室より、室賀信夫関係資料搬入。 |
| | | 3/10 | 総合研究大学院大学より、大学文書館の現状・設備について照会のため来館。 |

大学文書館所蔵の非現用法人文書の一部を廃棄。
 3/15 2003年度保存期間満了の事務本部および各部局の法人文書搬入(～18日)。
 西山、小樽商科大学百年史編纂室に出張。
 3/16 閲覧室内パソコンにおいて「グラフで見る京都大学の歴史ーひと目でわかる創立から現在ー」の公開開始。
 3/18 高エネルギー加速器研究機構よ

り、大学文書館の現状・設備について照会のため来館。
 3/23 西山、戦前・敗戦直後の京大について聞き取り調査のため出張(京都市)。
 3/24 歴史展示室内映像ブースにおいて「創立期の京都大学ー学生たちの一日ー」の公開開始。
 3/28 大学文書館教員会議。
 3/31 西村ゆり氏より、西占貢関係資料寄贈。

大学文書館の動き

法人文書の一部を廃棄しました

大学文書館では、所蔵する非現用法人文書の一部の廃棄を、2005年3月10日に行いました。当館で初めて行われた今回の廃棄は、現在各部局から搬入された非現用法人文書を収蔵している近衛館書庫に、今後移管される文書のためのスペースを確保するための措置です。現在、当館では事務本部から移管された文書23,976点、各部局から移管された文書24,180点、合計48,156点所蔵しておりますが、今回の廃棄では、そのうち各部局から移管された文書5,355点(全体の約11%、部局文書の約22%)が処分されました。内訳は、物品の購入等の記録や研究・教育に関連する支出等の記録、教職員の所得・手当関係等の記録が中心です。

今回の廃棄は分量が少なく、まだ試行段階と言えます。当館は京都大学の保存期間が満了した文書すべてを受け入れているため、京都大学における非現用法人文書の廃棄に関する責務を負っており、当館の重要な業務と位置づけています。また、選別や廃棄といった業務はアーカイヴズの世界でもこれからの議論の蓄積が求められている分野でもあり、当館では今後も研究の動向を踏まえて実践を積み重ねていきます。

人の動き (2004年10月～2005年3月)

2004年10月31日 佐々木丞平文学研究科教授、任期満了につき大学文書館長を退任。
 11月1日 藤井譲治文学研究科教授、大学文書館長に就任(兼任)。
 11月16日 伊藤孝夫法学研究科教授、大学文書館教授に就任(兼任)。
 2005年3月31日 嘉戸一将、大学文書館助手を退任。

資料提供のお願い

大学文書館では、京都大学の歴史や学生生活などに関係する資料を収集しています。

ご協力いただける場合は、下記までご連絡ください。

Tel :075-753-2651

Fax :075-753-2025

E-mail : archiv52@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

大学と政治

—「イールズ声明」をめぐる資料について—

相愛大学人文学部講師 嘉戸 一将

法人化など近年の国立大学の改革が決して政治と無縁ではないのと言うまでもないが、歴史を遡れば、「大学の自治」を揺るがす事件もあるように、大学と政治はときに緊張関係にあった。戦前の京都大学は、沢柳事件や滝川事件など大学と政治をめぐる事件の重要な舞台の一つだったと言っても過言ではないだろう。そうした事件の一つに、戦後間もない1949年から50年にかけて起きた「イールズ事件」と呼ばれるレッド・ページに関する事件がある。これは、当時、GHQ民間情報教育局顧問だったイールズ(Walter Crosby Eells)が1949年7月19日に新潟大学開学式で行った講演(以下、「イールズ声明」と表記する)をはじめとして、全国の大学で行った講演をめぐる一連の事件、とりわけ東北大学や北海道大学で起きた講演阻止などの事件を指す。

事件の発端になった「イールズ声明」は当時の新聞で紹介され、また翻訳されたものがいくつかの本で翻刻されている。大学文書館が所蔵する『評議会関係書類』には、その原文が綴じられており、京都大学も同声明に関心を寄せ、対応を検討したものと推測される。「イールズ声明」は、教員と学生の「特権と責任」の観点から「大学の役割」について論じられたもので、例えば教員は専門分野における研究・教育の自由という「特権」を有するが、共産主義について教育する自由は有さないとしている。とりわけ同声明が物議を醸したのは、共産党員の教員は外部からコントロールされており、「自由主義的」ではなく、「学問の自由」にむしろ反しているため、追放されるべきであると主張したためである。

イールズは1949年11月29、30日に京都大学にも講演に来ている。大学文書館が所蔵する「鳥養利三郎関係資料」には、当時総長だった鳥養利三郎によるスピーチ原稿(写真)と思われるものがある。内容は、同年11月4日に「イールズ声明」を敷衍したもの(ちなみに敷衍版の翻訳に鳥養自身によると思われる書き込みのある文書も鳥養資料に収められている)が発表されているのだが、それに対するコメントと考えられる。その中で鳥養は次のよう



「鳥養利三郎関係資料」(京都大学大学文書館所蔵)

に言っている。「本学は研究の自由を守るために、過去に於て、種々の経験を経て来た。このことに就ては私は長い間訓練をへた。(中略)何物にも捉れることなく、真実を見つめる心を以て真理の探究に従はなければならぬ。独善や、先入感等^{イデオロギイ}があつてはならぬ。と同時に外部からの指づや、命令に動いてはならぬ。大学の自治を守るために一番大切なことは外部からの干渉や、指揮命令に屈して本分に反してはならぬ」。イールズの立場に大筋で同意しつつも、共産党員であることを理由とする追放については「行き過ぎ」として批判している。「吾々は今大切な訓練期にある。必ずその内に正しい平衡状態に戻り得ると思ふ。この意味ですべて行き過ぎは不可。一の行き過ぎは反対の行き過ぎを呼ぶ。故に、自分は、単に党員だと云ふだけの追放は反対する。何処迄も、行動に於ける実際面で判断しなければならぬ。そして吾々は一日も早く正しき批判力の生れる様、その培養に努力すべきである」。

「学問の自由」が無制限の自由ではないにせよ、「外部」からのコントロールを批判する「イールズ声明」自体、「外部」からのコントロールになりうるように、自由を保障する権力はときに自由を名目に自由を侵害する。大学の自主性や自律性を名目にした法人化の中で大学と政治の歴史が想起される。